

寺ヶ迫遺跡

2010年

日田市教育委員会

目次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の内容	3
(1) 調査の概要	3
(2) 遺構と遺物	3
1) 掘立柱建物	3
2) 柵列?	5
3) 溝	7
4) その他のピット	7
5) その他の遺物	7
IV まとめ	9

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
第3図 周辺地形図 (1/2,000)	3
第4図 遺構配置図および土層図 (1/200、1/80)	4
第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	5
第6図 2号掘立柱建物跡・柵列?実測図 (1/60、1/40)	7
第7図 柱穴・溝および出土遺物実測図 (1/40、1/3)	8

表目次

第1表 出土遺物観察表	9
-------------	---

写真図版目次

写真図版1 調査区全景	
写真図版2 調査区全景 / 1号掘立柱建物跡と1号溝、柵列? / 2号掘立柱建物跡と柵列?	
写真図版3 1号掘立柱建物跡 P6・P12・P13 / 2号掘立柱建物跡 P3・P5・P6 / 柵列? P1 / P3	
写真図版4 1号溝土層、サブトレンチ土層 / 遺物写真	

本文写真目次

写真1 調査前風景	
写真2 試掘調査風景	
写真3 試掘調査時の柱穴検出状況	
写真4 調査前風景	
写真5 作業風景	
写真6 草三郎公民館の祠に集められた石塔類	



写真1 調査前風景 (正面の高台が調査区)



写真2 試掘調査風景



写真3 試掘調査時の柱穴検出状況

I 調査に至る経過と組織

平成19年1月、日田市天瀬町馬原字草三郎の住民より、地区の集会所を建替えたいとの問合せ（事前審査番号2006074）があり、具体的な建設計画について尋ねたところ、建設の契機が市土木建築部土木課の計画する市道湯山線改良事業に発すること、新集会所は改良後の湯山線に接し、道路工事の着工以前に道路予定地を掘削する可能性があることを知りえた。市道湯山線改良事業については前年秋に土木課より「工事予定区間は現道拡幅」との連絡を受けており、予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当せず、また現地確認により遺跡が存在する可能性が低いと考えられたことから、工事にあたっては問題ないと判断していた。しかし詳細な工事図面を確認すると、集会所付近は大幅な切土による道路新設区間となっており、地形から見て遺跡が存在する可能性が高いこと、小字名が「寺ヶ迫」と古い建物の存在を示唆する地名であることに加えて現地には石垣積みの平地が存在すること、隣接地に「貞和三年」（1347）の銘のある県指定有形文化財「草三郎大神宮五輪塔婆」をはじめ複数の宝塔や六地藏などの石造物が点在することなどから、工事前に予備調査が必要であると判断し、19年度工事区間を対象に19年5月16日～21日に試掘調査を行った。その結果、谷地では遺跡の存在は確認できなかったものの、新集会所隣接地（石垣積みの平地。なお石垣自体は近世以降のものであると判明。）において中世の所産と思われる柱穴群が検出され遺跡の存在が明らかとなった。しかしすでに工事のスケジュールが詰まっております遺跡を現状保存することは不可能であったため、緊急に土木課と協議を行い、この部分について6月26日から発掘調査を実施する運びとなった。調査の経過は次のとおりである。

6月26日 重機による表土除去開始 ～雨のため作業休止が続く～

7月23日 作業員による遺構検出・遺構掘下げ開始

7月26日 遺構実測開始

8月9日 空撮、機材撤収

8月10日 リース物件の返却をもって現地での作業完了

なお、調査組織は次のとおりである。

平成19～21年度

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長／～19年8月）

合原多賀雄（同教育長／19年9月～）

調査統括 梶原孝史（日田市教育庁文化財保護課長／19年4～9月）

原田文利（同文化財保護課長／19年10月～）

調査事務 井上正一郎（同課長補佐兼埋蔵文化財係長／～20年度）

北村 羊（同主幹兼埋蔵文化財係長／21年度）

伊藤京子（同専門員／19年度）

田中正勝（同専門員／～20年度）

河津美広（同専門員／21年度）、塚原美保（同主査）

調査担当 行時桂子（同主任／20年度～主査）、渡邊隆行（同主任）

調査員 今田秀樹（同主査）、若杉竜太（同主任）

矢羽田幸宏（同主事）、比嘉えりか（同囑託／20年度～）

発掘作業員 池田満夫、江田 親、五反田静子、後藤美知夫

財津利枝、筒井英治、原口勝利、平原知義、矢野洋子

整理作業員 坂口豊子



第1図 調査区位置図 (1/25,000)

II 遺跡の立地と環境（第1・2図）

寺ヶ迫遺跡は日田市東部（旧天瀬町域北部）の筑後川上流玖珠川北岸、支流高尾川により形成された深い谷の奥にある、標高約 335 m の丘陵尾根先端に位置する。

旧天瀬町域は、日田盆地の東に玖珠川を中心として広がり、この玖珠川によって町域は大きく二分されている。玖珠川南岸には標高 300～450 m の平坦な「五馬台地」が展開し、九重や阿蘇方面に続く。この「五馬台地」は大小の谷に区切られた多くの台地が連なることによって形成されており、それぞれの台地周辺の谷を流れる湧水や小河川の恵みを受けて古くから人々の生活が営まれていたようで、これまでに旧石器時代から歴史時代にいたる数多くの遺跡が確認されている。代表的な遺跡を列記する。

五馬台地の中心集落となる五馬市付近では、大坪遺跡⁽⁵⁾、宇土遺跡⁽⁷⁾がある。特に注目すべき点として、大坪遺跡では弥生時代中期～古墳時代前期の墓群で標石の存在が確認されている。また宇土遺跡 3 号墳⁽⁶⁾（市指定史跡）では 5 世紀の竪穴式石室（2 基並列）から血縁関係にある男女計 5 体の人骨が確認されている。宇土遺跡の墳墓の様相は『豊後国風土記』に記載のある「五馬媛」の存在を髣髴とさせ、当時の五馬地区の在地首長と大和政権の関係を物語るものといえる。宇土遺跡の南には旧石器時代の遺物集中部や弥生～古墳時代の集落から墓域への土地利用の変遷がうかがえる中尾原遺跡⁽¹²⁾・杉ソノ遺跡⁽¹³⁾がある。

五馬市より南の塚田付近では、陥し穴状遺構や旧石器時代の石器が確認された西遺跡⁽¹⁶⁾、縄文時代早期の集石遺構や中世の埋納遺構、近世の掘立柱建物群が確認された平原遺跡⁽²¹⁾、戦国期の墓群をはじめとして旧石器～近世にわたる遺構・遺物が確認された山田遺跡⁽²⁰⁾、旧石器～縄文時代の石器のほか近世の屋敷跡と考えられる掘立柱建物群が確認された原ノ久保遺跡⁽¹⁹⁾などがある。

玖珠川北岸に目を転じてみると、標高 200～400 m で西から東に向かって次第に高くなる山地となっており、その間に複数の谷が形成され、起伏に富んだ地形である。このような地形のため北岸は居住にあまり適していなかったようで、南岸に比べて確認されている遺跡が極めて少なく、寺ヶ迫遺跡の調査以前は筑前台岩木壘遺跡（中世の山城／市指定史跡／未調査）⁽³⁾が知られるのみであった^(註1)。ただしこの北岸では現在でも集落や道路脇、水田の畦道、山中などに多くの石塔類が点在しており、寺ヶ迫遺跡の周辺でも草三郎大神宮五輪塔婆（県指定有形文化財）⁽²⁾や宝塔・六地藏塔などが見られ、中世には少なくとも人の往来があったようである。

（註1）大字湯山のあたりで縄文土器や磨製石斧などが採集されているが、詳細不明である。



- 1 寺ヶ迫遺跡
- 2 草三郎大神宮五輪塔婆
- 3 筑前台岩木壘遺跡
- 4 福島原遺跡
- 5 大坪遺跡
- 6 宇土遺跡 3 号墳
- 7 宇土遺跡
- 8 穴田平遺跡
- 9 宮ノ原遺跡
- 10 新井川遺跡
- 11 天神ノ木遺跡
- 12 中尾原遺跡
- 13 杉ソノ遺跡
- 14 旭ヶ丘遺跡
- 15 近原遺跡
- 16 西遺跡
- 17 栃井遺跡
- 18 山ノ下遺跡
- 19 原ノ久保遺跡
- 20 山田遺跡
- 21 平原遺跡

第2図 周辺遺跡分布図（1/50,000）

《参考文献》

『大分県史』先史篇Ⅰ・Ⅱ、古代篇Ⅰ 大分県 1982～1984 / 『天瀬町誌 明日への礎』天瀬町 2005 / 『あまがせの文化財』天瀬町教育委員会 1998 / 渋谷忠章ほか編『宇土遺跡発掘調査報告書』天瀬町教育委員会 1986 / 綿貫俊一・坂本嘉弘編『五馬大坪遺跡』大分県日田郡天瀬町五馬所在遺跡の発掘調査報告書 天瀬町教育委員会 1989 / 今田秀樹編『塚田の遺跡』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告書第5・6集 天瀬町教育委員会 2001・2002 / 今田秀樹ほか編『高瀬Ⅲ遺跡・亀石山遺跡』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告書第7・8集 天瀬町教育委員会 2003・2005 ほか

Ⅲ 調査の内容

(1) 調査の概要 (第3・4図)

調査対象地は近年まで水田として利用されていたようで、試掘調査ではその水田基盤層1枚の直下、現地表面から僅かに20cmほどの深さで遺構が確認された。調査は試掘調査の結果を踏まえ、対象地南側より遺構検出面まで重機で掘下げ、遺構の確認を行った。調査区は幅約10m、長さ約34mの細長い形で、面積約340㎡のほぼ平坦な地形であり、本来は幅の狭い尾根であったと思われるが、西側の谷の斜面を埋め立てることで平坦面の広さを確保している様子がサブトレンチ1の土層観察からうかがえた(第4図)。遺構は調査区の中央～北側に集中しており、南側は水田盤直下が岩盤で、遺構廃絶後の水田化の際に大きく削平を受けたようである。またこの平坦地の北端は水田化の際に埋め立てられており、その時に石垣が築かれたようである(第4図サブトレンチ2土層)。

調査で確認された遺構は、掘立柱建物跡2棟、柵列?1基、溝1条、ピット多数である。このうちピットについては、木質の残るものや石の入ったものが僅かに見られたが、対応する他の遺構が検出されず、建物等の痕跡は認められなかった。以下、遺構ごとに説明を加える。

(2) 遺構と遺物

1) 掘立柱建物跡

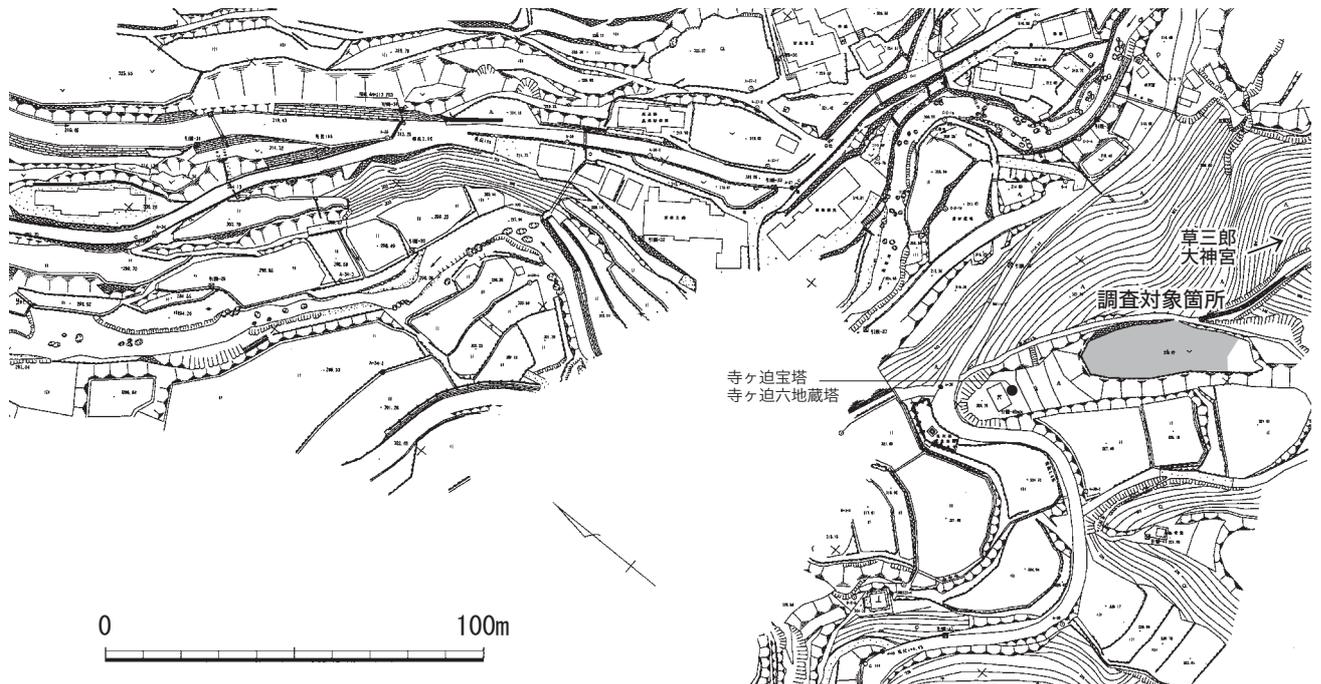
調査区中央よりやや北の遺構集中部で2棟検出された。平面的には切り合いがあるが、柱穴の切り合いがなく、柱穴からの遺物も少量であるため、前後関係を明確にすることはできない。

1号掘立柱建物跡(第5図、写真図版2・3)

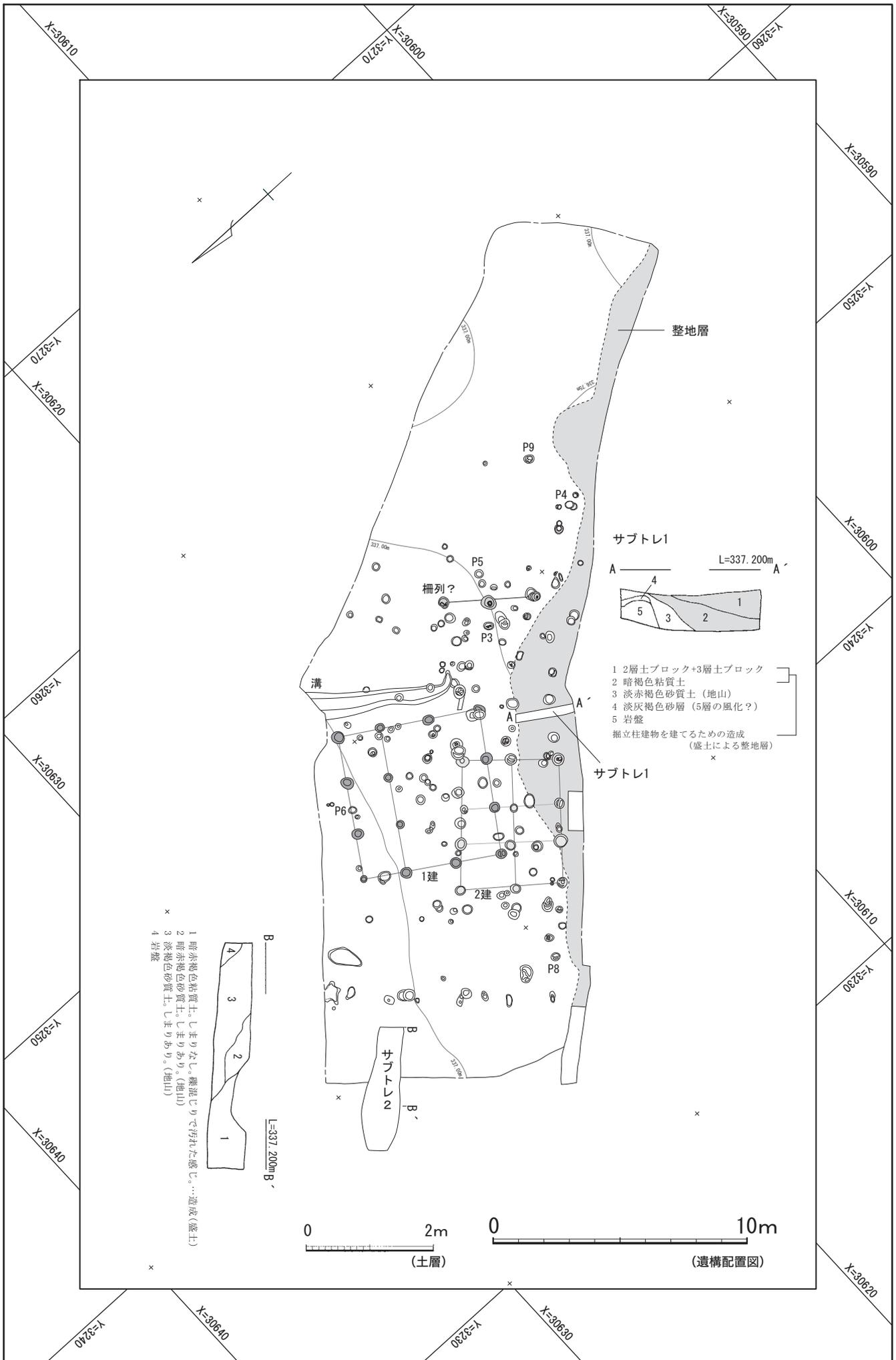
調査区中央よりやや北の東寄りで検出された、2間×3間で北東側に庇を持つ建物跡である。梁行方向の柱穴間距離約1.8m、桁行方向の柱穴間距離約1.9mを測り、心心距離で梁行約5.6m、桁行約5.7m、庇を含む面積は約31.9㎡を測る。検出面での柱穴の掘方は直径約30～50cmの円形を呈し、深さ約10～50cmである。遺物は、P10で須恵器片、P13で土師質土器坏片など数点出土しているが、図示可能なものはP8の土師質土器小皿のみである。

出土遺物(第7図、写真図版4)

1はP8出土の完形の土師質土器小皿である。外面底部は回転糸切り痕が残り、板状圧痕の痕跡もうかがえる。



第3図 周辺地形図(1/2,000)



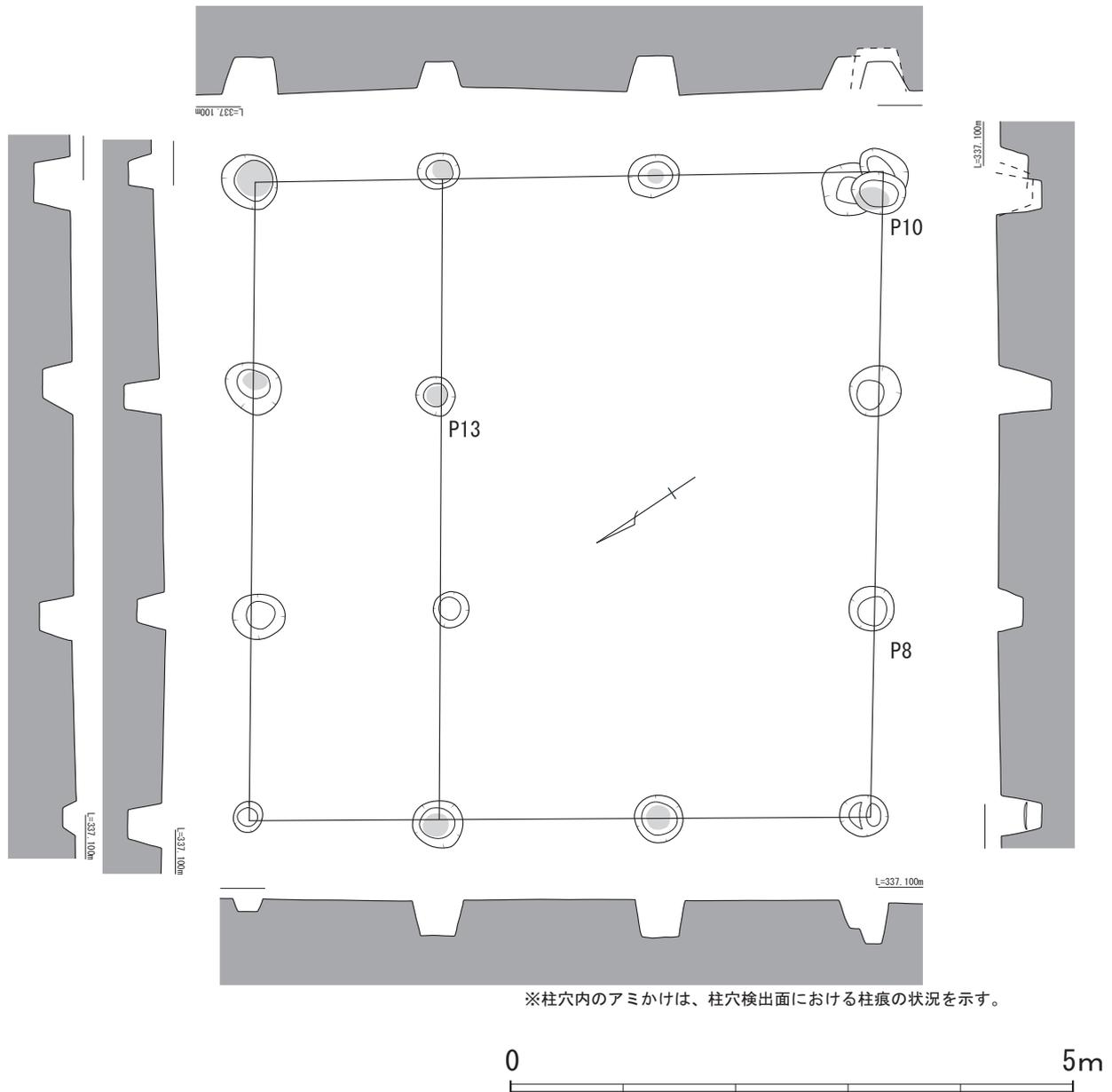
第4図 遺構配置図および土層図 (1/200、1/80)

2号掘立柱建物跡（第6図、写真図版2・3）

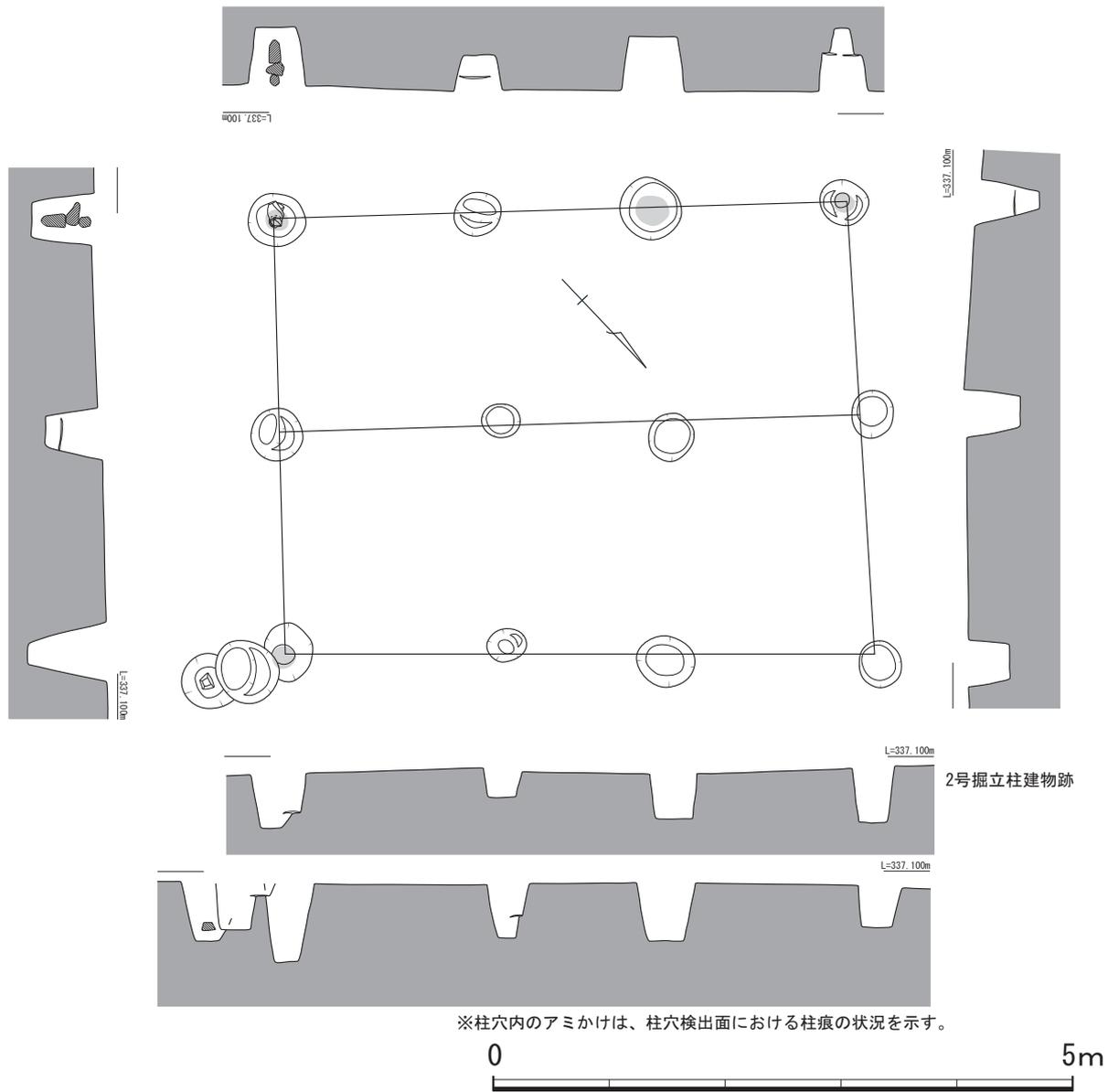
1号掘立柱建物跡の西側で検出され、1号掘立柱建物跡とは面積にして1/4程度が重複する、2間×3間の総柱の建物跡である。梁行方向の柱穴間距離は約1.9m、桁行方向の柱穴間距離約1.7mを測り、心心距離で梁行約3.8m、桁行約5.1m、面積約19.4㎡を測る。検出面での柱穴の掘方は直径約30～50cmの円形を呈し、深さは約20～70cmである。柱穴内からの遺物の出土はなかった。

2) 柵列？（第6図、写真図版2・3）

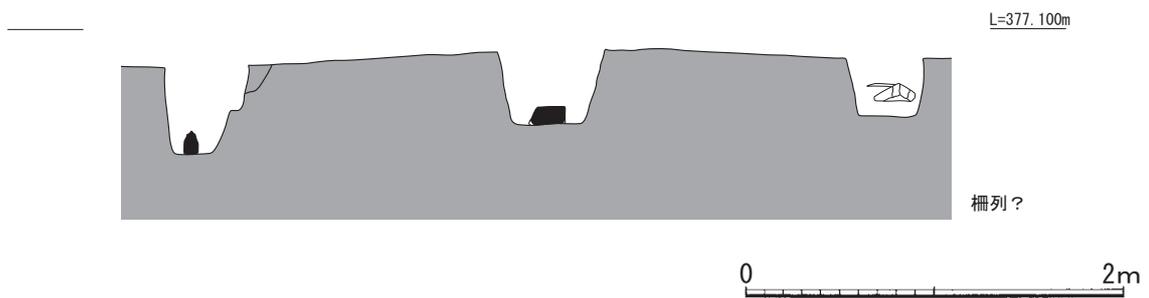
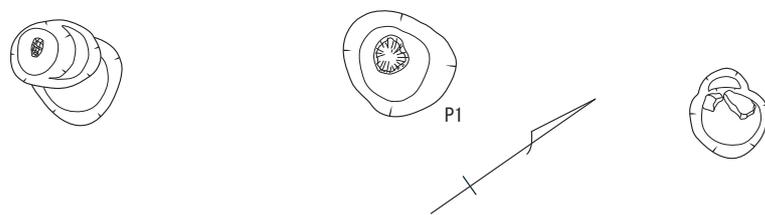
調査区ほぼ中央、掘立柱建物跡や溝の南側で1基検出された、2間分の柱穴の並びである。3つの柱穴にはそれぞれ柱木と思われる木質や石が残っており、柱穴間が約1.8mでほぼ等間隔であること、また掘立柱建物跡とほぼ方向が揃っていることから、掘立柱建物に伴う柵列の可能性が考えられる。検出面での柱穴の掘方は直径約40～60cmの円形を呈し、深さは約30～50cmである。いずれの柱穴からも、木質・石以外の遺物の出土はなかった。



第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



※柱穴内のアミかけは、柱穴検出面における柱痕の状況を示す。



第6図 2号掘立柱建物跡・柵列?実測図 (1/60、1/40)

3) 溝 (第7図、写真図版2・4)

調査区ほぼ中央、掘立柱建物跡と柵列の間で1条検出された。検出面での長さ約5.7m、最大幅約1.1m、深さは最大で約20cmを測る、浅い溝である。1号掘立柱建物跡の南辺と平行し、溝の南端は柵列へ向かって僅かに屈曲する。溝の底面は調査区外へ向かって下がる。なお遺構中に見られる小ピットは切り合いではなく、溝を掘下げた結果検出されたものである。遺物の出土はなかった。

4) その他のピット (第7図、写真図版3)

上記のほか、調査では多数のピットが検出されたが、いくつかには根固めの石や柱木と思われる木質が残存しているものが見られた。

P3は柵列の北で検出された、直径約30～40cmの楕円形を呈し、深さ約45cmを測る柱穴である。内部には木質が残存していたが、それ以外の遺物の出土はなかった。

P9は調査区南側、遺構群の最も南で検出された、直径約35～40cmの楕円形を呈し、深さ約15cmを測る柱穴である。内部には複数の石が残存していたが、それ以外の遺物の出土はなかった。

出土遺物 (第7図、写真図版4)

図示したピット以外で、ピットより出土した遺物を紹介する。

2はP6出土の土師質土器杯の体部片である。磨耗が激しく調整不明である。4はP4出土の土師質土器杯の口縁片である。磨耗が激しく調整不明である。5はP8出土の土師質土器杯の口縁片である。内面の一部にケズリが見られるが、ほとんどは磨耗のため調整不明である。7はP5出土の青磁碗の口縁片である。内外面に文様があり、特に外面口縁端部には雷文が見られる。

5) その他の遺物 (第7図、写真図版4)

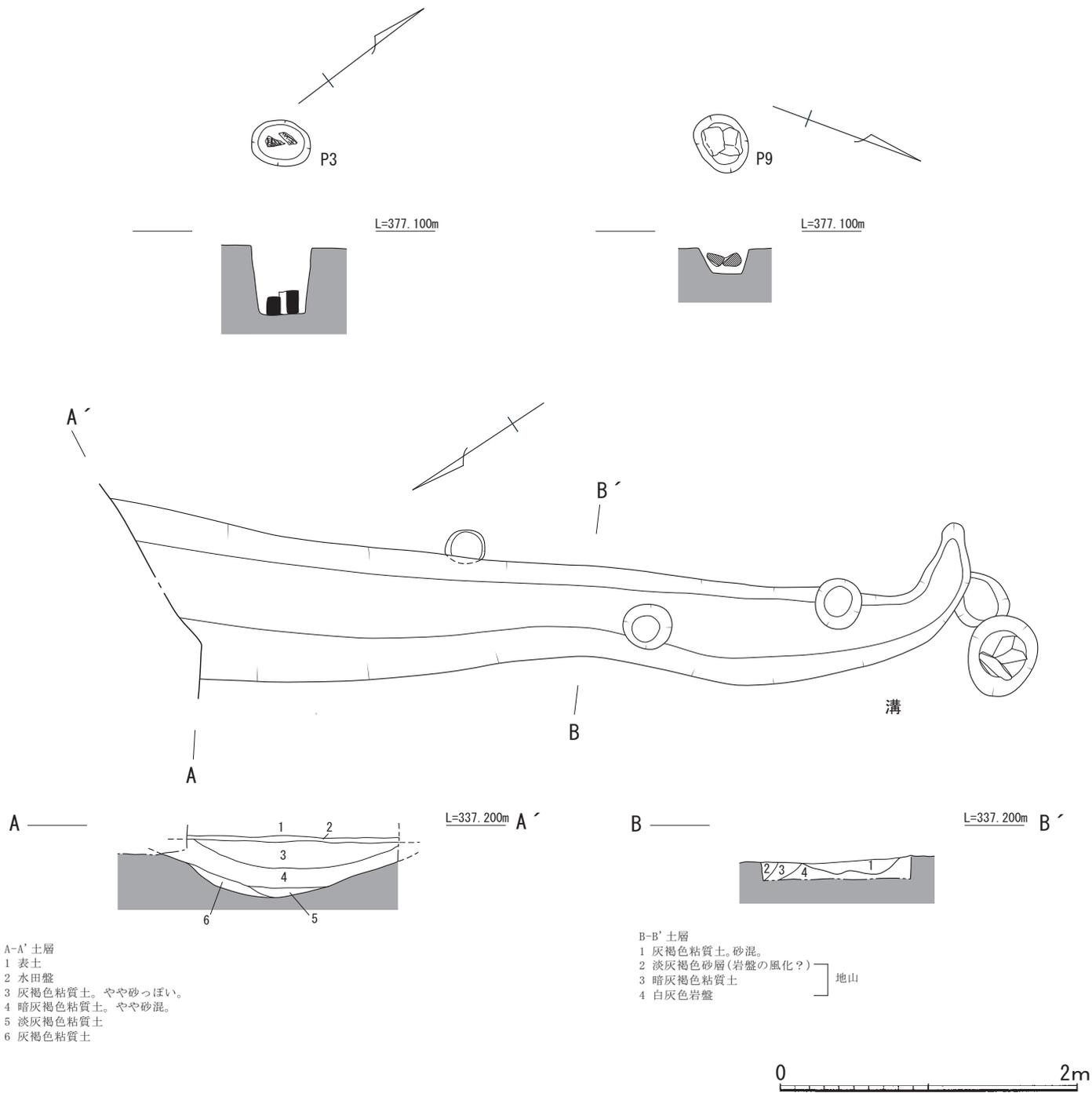
3はサブトレンチ1の1層出土の土師質土器杯である。磨耗が激しく調整不明のため、口径・底径は確実でない可能性がある。6は一括遺物で土師質土器杯の破片である。磨耗のため調整不明であるが、内面底部には回転ナデの痕跡がうかがえる。8は一括遺物で青磁碗の口縁片である。外面に細連弁文が見られる。



写真4 調査前風景

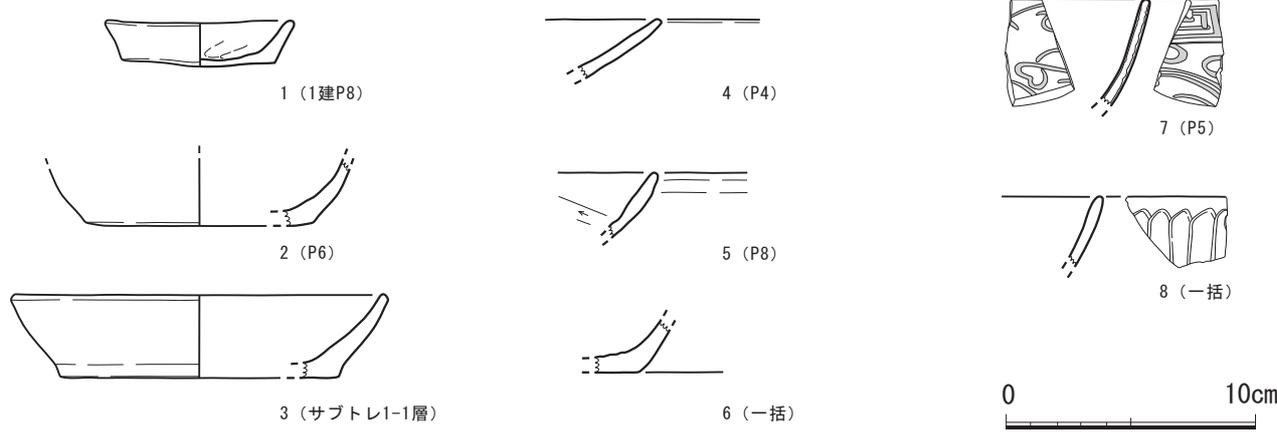


写真5 作業風景



- A-A' 土層
- 1 表土
 - 2 水田盤
 - 3 灰褐色粘質土。やや砂っぽい。
 - 4 暗灰褐色粘質土。やや砂混。
 - 5 淡灰褐色粘質土
 - 6 灰褐色粘質土

- B-B' 土層
- 1 灰褐色粘質土。砂混。
 - 2 淡灰褐色砂層(岩盤の風化?)
 - 3 暗灰褐色粘質土
 - 4 白灰色岩盤
- 地山



第7図 柱穴・溝および出土遺物実測図 (1/40、1/3)

IV まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡や柵列？、溝、柱穴の遺構と遺物が検出された。それぞれの時期を確認すると、まず掘立柱建物跡では、1号掘立柱建物跡 P8 より土師質土器小皿 1 点の出土が見られ、器形の特徴などから田中裕介氏の分類^(註1)による小皿 B 類、15 世紀中頃～16 世紀前半のものと位置づけることができよう。2号掘立柱建物跡からは遺物の出土はないが、柱穴の形状や柱痕が1号掘立柱建物跡と類似しており、両者にそれほど時期差はないものと考えられる。しかし同時並存はありえず、また前後関係も不明である。柵列？についても柱穴からの遺物の出土がなく、時期は不明といわざるを得ない。ただし列の方向が1・2号掘立柱建物跡と著しく異なるようなものではないため、いずれかに付随する施設であった可能性が考えられる。溝についても遺物の出土がないため時期不明であるが、1号掘立柱建物跡の梁行方向と平行することから、1号掘立柱建物跡の付随施設であると見て問題ないと思われる。その他建物等としては成立しないものの柱穴からの遺物を見てみると、土師質土器では、P4 と P 8 の坏は田中氏の坏 C 類で 15 世紀後半～16 世紀中頃、P6 の坏は田中氏の坏 B1 類で 15 世紀中頃～16 世紀前半と思われる。P5 の青磁碗片は内外面に花文と思われる文様および口縁部外面に雷文が施されていることから亀井明德氏の分類^(註2)による A 類に該当し、14 世紀中葉～15 世紀後半と位置づけられる。一括資料である第 7 図 8 の青磁碗は外面に先端部が剣先状を呈する細連弁文が施されていることから亀井氏の B-1 類に該当し、A 類と共伴する例があることから 14 世紀中葉～15 世紀後半と考えられる。概して土師質土器や青磁碗に中国産染付を伴わないため 16 世紀中頃以後には下らないと思われ、青磁は伝世の可能性もあるので、土師質土器が指し示す 15 世紀中頃～16 世紀中頃の遺跡と考えて差し支えないであろう。

この遺跡の周辺には草三郎大神宮五輪塔婆をはじめ、宝塔（国東塔）や六地藏塔（江戸時代の造立とされる）などの石造物が多数散在している（写真 6）ことは I で触れた。五輪塔婆と宝塔（国東塔）には「貞和三年三月」（1347 年）の銘が刻書または墨書されており、出土遺物の時期を 1 世紀ほど遡る。これらの石造物が原位置を保っているかどうかの問題はあるが、少なくとも南北朝期には人の往来があり、この一帯が祈りの地として意識されていたことがうかがわれる。立地条件や出土遺物量の乏しさからこの地が生活の場として利用されたことは考え難く、短期間のうちに利用・廃絶された特殊な建物か、或いは地名が示すとおり「寺」のような役割を持った建物が存在した可能性が想定される。玖珠川北岸は史料面でも乏しく、この遺跡を含め、今後の調査が期待される地域である。



写真 6 草三郎公民館の祠に集められた石塔類（祠の奥が工事中の道路予定地）

(註 1) 田中裕介編『慈眼山瀬戸口遺跡（A 地区）』

大分県文化財調査報告第 85 輯 大分県教育委員会 1991

(註 2) 亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論叢』1980

《参考文献》中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1997

『天瀬町誌 明日への礎』天瀬町 2005 ほか

第 1 表 出土遺物観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量			調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 7 図 -1	1 建 P8	土師質土器	小皿	7.5	6.0	1.8	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	ABCG	良	黄褐色	黄褐色	完形。底部外面は回転系切り。板状圧痕あり？
第 7 図 -2	P6	土師質土器	坏	-	(9.0)	(2.7)	不明	不明	ABCDGH	良	浅黄褐色	橙色	
第 7 図 -3	サブトレ 1-1 層	土師質土器	坏	(14.9)	(11.0)	3.3	不明	不明	ABCD	良	明赤褐色	明赤褐色	底部外面は回転系切り。磨耗激しく、復元法量は不確実。
第 7 図 -4	P4	土師質土器	坏	-	-	(2.3)	不明	不明、口縁端部はヨコナデ？	AD	良	橙色	橙色	
第 7 図 -5	P8	土師質土器	坏	-	-	(2.6)	ヨコナデ	不明、一部ケズリ？	ABCDG	良	黄褐色	黄褐色	
第 7 図 -6	一括	土師質土器	坏	-	-	(2.1)	不明	回転ナデ？	ABCDG	良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 7 図 -7	P5	青磁	碗	-	-	(4.3)	-	-	-	良	釉：緑灰色	胎土：灰白色	内外面に文様、外面口縁端部に雷文あり。
第 7 図 -8	一括	青磁	碗	-	-	(2.8)	-	-	-	やや不良	釉：オリーブ灰色	胎土：灰色	外面に細連弁文あり

※単位はcm。() は現存長。

胎土…A: 角閃石 B: 石英 C: 長石 D: 赤色粒子 E: 白色粒子 F: 黒色粒子 G: 雲母 H: 砂粒



調査区全景（南東から）
※矢印の箇所が調査区



調査区全景（北西から）



調査区全景（真上から）



調査区全景（南東から）



1号掘立柱建物跡と1号溝、柵列？



2号掘立柱建物跡と柵列？



1号掘立柱建物跡 P 6



1号掘立柱建物跡 P 12



1号掘立柱建物跡 P 13



2号掘立柱建物跡 P 3



2号掘立柱建物跡 P 5



2号掘立柱建物跡 P 6



柵列? P 1



P 3



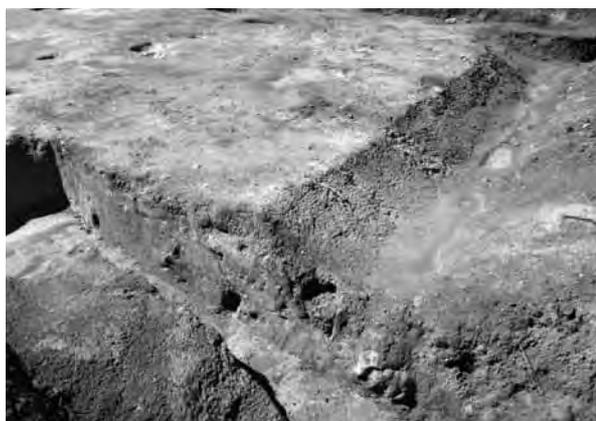
1号溝A-A' 土層



1号溝B-B' 土層



サブトレンチ1土層



サブトレンチ2土層



7-2



7-3



7-1



7-6



7-8



7-7

報告書抄録

ふりがな	てらがさこいせき
書名	寺ヶ迫遺跡
副書名	—
巻次	—
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第90集
編著者名	行時 桂子
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2010年2月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺ヶ迫遺跡	大分県日田市天瀬町馬原字寺ヶ迫5352-7ほか	44204-6	204341	33° 16' 34"	131° 2' 5"	20070626 ～ 20070810	340 m ²	市道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺ヶ迫遺跡	集落	中世	掘立柱建物跡2棟、 柵列跡?1基、 溝1条、柱穴多数、 整地層	土師質土器、青磁	

要 約	<p>調査では、中世後期の建物跡等が確認された。しかし遺物量が極端に少ないなど生活痕が薄く、短期間のものであった可能性がある。また、遺跡の立地から見ても常時人が居住した空間とは考え難く、特殊な状況下で使用されたことが考えられる。</p> <p>遺跡のある地域はこれまで筑前台岩木罌遺跡（中世の城跡／市指定史跡／未調査）以外に遺跡の存在がほとんど知られていなかったが、遺跡の背後丘陵や近隣には中世の所産と思われる石塔類が数多く点在しており、今回の調査により中世に遡る歴史の一端が明らかとなった。とは言え、不明な点も多く、この地域の今後の調査が期待される。</p>
-----	--

寺ヶ迫遺跡

2010年2月25日

編 集 日田市教育庁 文化財保護課
877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 日田時報紙器印刷（株）
877-0086 大分県日田市二串町345-6